

# 北八代プロジェクト

安枝英俊

キーワード：ワークショップ，作品づくり，北八代地区，集会所

## 1. はじめに

姫路市北八代地区では、2016年に自治会集会所が竣工し、様々な地域活動が実施されてきた。安枝研究室が担当した集会所の基本計画では、住民がいつでも気軽に訪問ができるように、軒下の半屋外空間や、内部を視認しやすい空間構成を提案した。

しかし、2020年のコロナ禍以降、秋祭りや納涼祭をはじめとする自治会行事が中止になるなど、これまでのように地域活動を実施することが困難な状況になっており、住民が交流する機会が減少している。このような状況を踏まえ、このプロジェクトでは、2022年度から地域連携を再開するにあたり、作品づくりをする住民と、その作品を見た住民が、作品を介して交流できることを目的とした、作品づくりワークショップ（以下、WS）を実践している。



写真1 北八代自治会集会所



写真2 折り紙教室の作品展

## 2. 作品づくりワークショップについて

### 2.1 折り紙教室の作品展（2023年6月18日）

第1回の作品づくりWSは、北八代自治会の老人会である「笑和クラブ」の折り紙教室の作品展にあわせて開催した。作品の特徴や工夫した点などの作り手によるコメントを、作品と一緒に展示することで、作品を介した交流が実現すると考えたが、コメントを書きづらいと考える作り手もいた。作り手によるコメントを増やすことについては、次のWSでプログラムを改良することになった。

### 2.2 タオル人形WS①（2023年8月27日）

8月の納涼祭に開催したWSでは、制作技術に関わらず、自分らしい作品をつくるのが、作り手がコメントを書きやすくなることにつながると考えた。そこで、WSでは、タオル犬という、はさみや針を使わなくても、タオル1枚を折ることで簡単に制作でき、飾り付けにより自分らしい作品にしやすい手芸作品を制作した上で、作り手がコメントを記入し、作品と一緒に展示することにした。



図1 タオル人形ワークショップ①

タオル犬をテーマにした理由については、誰にでもつくりやすく、飾り付けなどで自分らしい作品に仕上げることができることに加えて、動物の作品は、作り手も、それを見た人にも愛着が生まれやすく、コメントをしやすいと考えたためである。

このWSでは、20名のうち8名がコメントを記入したが、そのうち3名のコメントは、「たのしかった」など、参加したことの感想などであり、自分の作品の特徴を記入した作り手は少なかった。そのため、次回WSでは、作品の特徴に関するコメントが集まるように、プログラムを改良することになった。

### 2.3 タオル人形WS② (2024年1月14日)

8月のタオル人形WS①では、参加者が、自由な時間に集会所に来訪し、各自で作り始めていたた



参加無料 1人でも大歓迎!

## タオル人形づくり ワークショップ

自分だけのオリジナル作品をつくろう!

日時 1月14日  
①11:00~11:45 (定員12名)  
②12:00~12:45 (定員12名)

場所 北八代自治会集会所

集会所で県大生によるワークショップを開催します!  
タオルで犬やウサギの人形をつくり、リボンやポンポンで飾り付けをして、自分だけの作品をつくってみませんか?

予約なしで、一部と二部それぞれ先着12名様までです!  
子どもから大人まで参加できるのでお気軽にお越しください!

主催: 北八代自治会 共催: 兵庫県立大学環境人間学部安核研究室



図2 タオル人形ワークショップ②



図3 タオル人形ワークショップ③

め、お互いの作品を見せ合う機会が少なかった。

そこで、第2回のタオル人形WSでは、互いに見せ合いながらつくることが、自分の作品の特徴に気づくと考え、少人数のグループに分かれて同時につくり始めるようにした。作り手のコメントについては、23名中14名から収集した。

### 2.4 タオル人形WS③ (2024年1月29日)

第3回のタオル人形WSでは、自身の作品の特徴は、他者から指摘されることによって気づくことができると考え、見せ合いながらつくだけでなく、他者と作品を相互批評する場を設けた。作り手のコメントについては、14名中12名から収集できた。

このWSでは、タオル犬より難易度の高い、熊をテーマにしたこともあり、相互批評においては、「形が整っている」など、制作技術に関するコメントが多かった。そのため作り手が記入したコメントも、作品の個性や特徴よりも、制作において難しかったこと、工夫したことに関するコメントが多かった。

### 3. まとめ

WSの実践を通じて、作り手が作品の特徴・個性に気づくためには、制作技術に関わらない特徴について、他者からの評価を得るというプロセスが有効であることがわかった。今後も、これらの知見を踏まえ、プログラムを改良しながらWSを実施する。